

文学部の開設

一九五一（昭和二十六）年四月一日、駿河台校舎に文学部が開設された。

開講時の文学部は、文学科（昼・夜、定員各五〇人）と史学科（昼、定員五〇人）の二学科からなり、初代学部長には吹田順助教授（ドイツ文学）が就任した。

新学部を設置目的と使命は、「広く一般教養学科を授けると共に進んで哲学、史学、社会学、文学に関する理論を教え、教養、学識豊かな人間の形成を目指し、以て国家並びに社会の福祉、発達に有為なる人材を養成すること」とされ、社会学科の設置こそ実現しなかったとはいえ、翌年には哲学科が、翌々年には哲学科中に社会学専攻が開設されている。

これにより、本学は法学部・経済学部・商学部・工学部および文学部の五学部を擁する新制大学となった。

文学部新設の契機として、『中央大学七十年史』は次の二点を指摘している。第一の契機は、戦前期から文学



新設文学部は1953年から後楽園校舎を使用

四学部の場合と同様に財団法人中央大学の理事会であった。五〇年九月三日、理事会は「新制大学文学部認可申請に関する件」を決議し、同月三十日学校教育法第四条にもとづく文学部設置を文部省に申請している。

また、同年十一月十七日には臨時評議員会に文学部設置を提起し、「文学部は理工学部よりも経費が割合に嵩む」との異議を抑えて承認をえている。

同年十二月十五日制定の私立学校法により、私立大学の設立主体は「学校法人」とされるが、それ以前の新制大学は、旧制度の財団法人によって設立されていたのである。

学生の中にも、文学部の開設を求める声はあった。たと

部の設置を求める要望があった点である。本学関係者には、高度な専門的学識を誇る反面で「それら学識の根幹となるべき一般基礎的学科の教養に欠けるところがある」という「暗黙の潜在意識」があり、それが官学出身者への「一種のひけ目」となっていたため、教養の根底を培う学部＝文学部の併設を切望したとしている。第二は、新制大学への移行が設置の契機となった点である。新制大学のカリキュラムは一般教養科目と専門科目からなり、一般教養科目は人文科学・社会科学・自然科学の三系列に分けられたが、この一般教養科目を旧制の予科および専門部教員のみで充足することは不可能であったため、多くの教員を新規採用せざるをえなかった。

そこで、各学部の一般教養科目を完成させると共に第一の契機も実現させる「一石二鳥」の方策として、文学部が開設されたというのである。

ところで、文学部の新設を推進したのは、他の新制

えば、『中央大学新聞』五〇年三月二十日号は、宮本明「豊かな平凡人を生むため文学部の設置を望む」という一文を掲載している。宮本は法学部三年生で、学友会文化部に属する文化科学研究会の会長を務めていた。彼はまず、「中大生は概ね人間らしい呼吸をしていません」と断言している。当時の本学は、学生数の急増に施設の拡充が追いつかない劣悪な教育環境にあり、その中で資格試験のみを目指す学生の姿をそう表現したのである。宮本は、「条文の暗記をする前にその適用の場に於ける人間」を理解しなければならず、そのためには文学を学ぶべきであるとしている。その上で、彼は大学を「ひとりの天才より百人の教養人を育てるところである事が重要」と位置づけ、「世界の仲間入りをする為にも豊かな平凡人を多く生む為にも文学部の設立を望んで已みません」と結んでいる。

大学教育において学問の専門性を重視するか、教養人の育成を求めるといった対立は現在でも大きな問題となっているが、占領下における本学学生の中には、世界に通用する「豊かな平凡人」育成を文学部の設立に託す者もいたのである。